

聖書宣教会通信

東京都羽村市羽西 2-9-3 Tel:042(554)1710 Fax:042(554)5562 www.bibleseminary.jp 振替 00150-6-34971

巻頭言

新約聖書の三つの賛歌 聖霊に満たされて

(聖書神学舎教師) 飯島 千雍子

ルカの福音書には三つの賛歌、
「マリアの賛歌」(1章46節～Magnificat)
「ザカリヤの賛歌」(1章68節～Benedictus)
「シメオンの賛歌」(2章29節～Nunc dimittis)
が記されています。これらの賛歌は、初代教会から今日まで、歌として、あるいは管弦楽を伴った作品として、教会の内外で歌われてきました。岳藤豪希師も二重唱による「マリアの賛歌」を作曲しています。讃美歌95番(わが心はあまつ神をとくとみ)は教会で賛美されています。

三つの賛歌は、ヨーロッパでは、括弧に題したラテン語で知られています。私はこれらの賛歌を歌い聴く、その都度、新たに教えられることがあります。2014年、聖書宣教会賛美礼拝では、H.シュッツの「わがこころ、主をあがめ」を賛美しました。シュッツは、伴う楽器の二重奏も含め、マリアの告白のこぼの各節に従って多様に作曲し、こぼを音に、テキストの内容を音楽であきらかにしています。ドイツ語で作曲された詞を日本語に、できるだけ日本語の聖書のこぼのとおり歌えるように工夫する作業は困難を覚悟しつつも、はるかに超える恵みをいただく仕事です。みことばと向き合うこの仕事から教えられることは多々あります。それまで気付かなかった、みことばにしるされてある恵みに眼が開かれるという経験です。

J.S.バッハは〈マリアの賛歌〉Magnificatを各節ごと、合唱、独唱、二重唱による12曲に作曲しています。47節は第二ソプラノによって軽やかに弾んで〈神を喜びたたえます〉と歌われ、48節は全く異なる音楽が先ずオーボエによって導かれます。この歌は〈卑しいはしたために目を留めてくださった〉〈私をしあわせ者と〉にあらわされたマリアの敬虔と恵みを賜ったその信仰を楽器の音色、音型、拍子他で伝える曲として知られています。この曲を歌うことで、マリアの信仰と敬虔、賜った祝福について深く教えられました。

カンタータ82番の第1曲(Ich habe genug! 十分です)と歌われる詞は、シメオンの「主よ。今こそあなたは、...みことばどおり、安ら

かに去らせてください。」に深く教えられた者の告白です。歌のテキストは〈私の慰めは、ただ、イエスが私の主であり、私が主のものであることにあり、シメオンのように信仰のうちに〉と続きます。

私は、本科の教会音楽実習、賛美歌学、聖書科教会音楽専攻の礼拝史、声楽などの科目を担当していますが、課題として、賛美にかかわる諸々のことが聖書でどのように教えられ、しめされているのか心にとめております。以前、申命記31章から神のあかしであるみことばを歌うことについて教えられたことを書きましたが、今、三人の賛歌に新たに驚かされています。①まだ幼かったと云われるマリアが、御使いガブリエルから「おめでとう、恵まれた方」と告げられた時、「私は主のはしためです。おことばどおりこの身になりますように」と応答した信仰と敬虔に。②ものが言えず、話せなくされたザカリヤの口が開け、舌が解け「主はその民を顧みて、贖いをなし」と預言して言ったことに。③正しい、敬虔な人シメオンが御霊に感じて宮に入り、幼子イエスにお会いしたことに。聖書は記しています。聖霊に満たされたエリサベツの祝福にマリアは応答し、ザカリヤは聖霊に満たされて、預言したと。シメオンもまた聖霊が彼の上にとどまっていたことを。

みことばの真理は聖霊によってあきらかにされ、それは主が賜るさいわい、祝福であります。福音を伝えるみことばの奉仕は主から賜る祝福、それゆえ厳しくも重くもあります。研修生一人ひとり、家族の方たちも、畏れ、喜び、感謝をもって召しに従い、必要な訓練、学びが出来ますようお祈りください。また、みことばの奉仕に召された方々が感謝し召しに従うことが出来ますようお祈りください。



「聖書は誤りなき神のことば」

シカゴ声明再考～(その1)

聖書宣教会 校長 鞭木 由行

1970年代に聖書の無誤性を巡って、福音派の中に大きな論争があったことは、その時代を生きた者たちにとって周知の事実ですが、その論争自体を知る人々は、もはや少数であることを、先日ある先生からの指摘で初めて気付かされました。確かに、あの当時20代であった者たちは、すでに60代を迎えており、団塊の世代にとっては懐かしい思い出であっても、その後の若い世代にとっては、そのような論争があったということ自体が、驚きでさえあるかも知れません。問題の所在はこういうことでした。従来、福音派諸教会は「聖書が原典において、事実と異なるいかなる誤りも記してはいない」という「聖書の無誤性」を受け入れていました。しかし、その無誤性をもう少し狭く捕らえて、信仰面で私たちを誤って導くことはないが、科学や歴史などの客観的記述では誤りがありうる主張する人々が登場してきたのです。その立場の人々は聖書の無誤性を用いないで「不可謬性」を用いました。この論争によって、一貫した聖書信仰には聖書の無誤性が重要であり、不可欠であることを確認しましたが、その後日本では、聖書論を巡る議論は下火となり、殆ど公に論じられることがなくなりました。しかし、昨今、この問題を改めて考えなければならない状況が生まれて来ているように思われます。そこで、この問題を「シカゴ声明」を再考する形で、少し考えたいと思います。

「シカゴ声明」は、聖書の無誤性を巡る論争があった頃、当時の聖書神学舎の教師たちによって翻訳、出版され、この論争に一石を投じました。その声明文の正式名称は「聖書の無誤性に関するシカゴ声明」です。1978年10月26日に「聖書の無誤性に関する国際協議会」(ICBI)は、シカゴで、聖書の無誤性に関する頂上会議を招集し、268名の神学者たちが3日間にわたる会議に参加しました。参加者は、様々な背景を持った人々が、アジア、アフリカを含む34の神学校、33の

大学その他の学校、41の教会、38の超教派団体から集まってきました。集った人々は多様でしたが、目標はただ一つ：神のみことばの權威を信じる者が、聖書が「誤りなき神のみことば」と言うとき、その「誤りなき」が何を意味しているのかを明確に述べることでした。完成された声明文に最終的に署名したのは268名中240名でした。その中には、J. I. パッカー、C. ヘンリー、フランシス・シェーファー等がいます。

この声明は、序文、要約声明、主張と否定の条項(これが本文)、そして解説からなっています。ここでは、主に「主張と否定の条項」の中で、特に無誤性と関係の深い項目を選んで紹介したいと思います。「主張と否定の条項」は、全部で19項目からなっていますが、聖書の無誤性に直接関係しているのは、第9項から第12項です。しかし、それに先立ち聖書の「靈感」をどう考えるかということが、無誤性を大きく左右することから、シカゴ声明は、まず聖書の靈感の定義に向かっています。そして、聖書が靈感されたということは、聖書の思想や概念のレベルだけではなく、ことばそのものが靈感されたことを明らかにしています。このような靈感理解は「言語靈感」と呼ばれています。その上で第9項から聖書の無誤性を展開しているのです。今回は最初の第9項を考えてみます。

第9項(靈感と無誤性)

「靈感は、聖書の著者たちが語り、また書くように動かされたすべての事柄について、真の、信頼できることばを用いることを保証したことを、ただし全知がゆるされたのではないことを、私たちは主張する。」

「これらの筆者が有限であり、罪の性質を持つことにより、必然的にせよ、そうでないにせよ、神のことばに歪曲あるいは虚偽が持ち込まれたということを私たちは否定する。」

この第9項は、無誤性が、聖書の靈感によって可能となったのであり、無誤性とは言語靈感の結果であることを明らかにしています。ですから無誤性の根底にあるのは聖書の靈感をどう考えるかという問題です。靈感によって聖書の著者たちが全知になったために、誤りが入り込まなかったというのではありません。では人間に過ぎない者がどのようにして誤りなき神のことばを書き得たのでしょうか。それは、靈感によって、御霊の圧倒的な御支配によって、聖書著者たちが、語るように、また書くように導かれたすべての事柄、事件に関して、それらを誤ることなく、また不正が進入しないようにしてくださったということです。従って、著者の人間としての有限性のゆえに、あるいは罪の性質のゆえに、誤りが侵入した可能性を否定しているのです。

著者は全知ではなく、限界がある人間なのに、どのようにして無誤であり得るのかと疑問を呈する人々がいます。そのような問いには「全知でなければ無誤ではありえない」という誤った前提があります。神が書物に対して無誤性を付与することと、その著者に対して全知性を付与することとは区別して考えるべき事柄です。もし神がすべてを啓示しようとしたのであれば、全知性は必要であったかもしれません。しかし、神はすべてを啓示しようとしたのではなく、あくまで、救いに必要な、信頼できる真理を伝えようとしたのです。ですからこの第9項は、全知であることが無誤性の必要条件

ではないことを明らかにしています。

その後続く否定条項では、人間が有限で罪の性質をもつ被造物であることを理由に、聖書に歪曲や誤りが入り込んだはずであるという主張を否定しています。確かに人間は有限で、罪の性質に冒されていますが、それだからと言って、人間が必然的に間違いを犯すと考える必要はないはずで、聖書著者は圧倒的な聖霊の影響下にあったゆえに、人間の有限性を越えて、用いられたのであり、人間の有限性を根拠に誤りが必然的に入り込んだと考える必要はありません。

無誤性を否定する人々は、聖書に「言語靈感」や「無誤性」を帰することは、聖書の中に仮現的見解（聖書著者の果たした役割の過小評価、あるいは人言性を仮現的なものとするような見解）を持ち込むことになると言います。彼らによれば、無誤性という超自然的側面が入り込むことによって聖書著者の人間性（人間の役割）が無視されてしまうことを懸念するのです。しかし、ここでも根底にあるのは靈感をどう考えるかということです。言語靈感は、聖書著者の人間的役割を十分に認めた上で、なおそのことばの選択に誤りないように導いた聖霊の働きです。そのようなことが、具体的にどのようにして可能であったかについて、具体的に、十分に分かりませんが、聖書はそのことを自証しており、それゆえに私たちは仮現的であるという批判を退けるのです。

- 聖書神学舎の新しいパンフレットが作成されました。ウェブサイトでイメージをご覧いただけます。教会や団体でぜひご活用ください。取り寄せのご要望は事務所にお伝えください。喜んでお送りします。
- 2016年度の出願期間が始まっています。この国、この時代に、献身者がさらに起こされ、この学舎にも主の選びの器たちが御旨の通りに導かれてくるようにお祈りください。
- ボランティアのご奉仕を感謝しています。植栽の管理や清掃、聖書宣教会通信の発送作業のお手伝い、お米や野菜等々の差し入れなど、多くの方々の愛のご奉仕に感謝しています。次回の通信発送は3月8日に予定しています。

編集後記

学舎では12月1日にクリスマス礼拝をささげ、祝いの食卓を共にしました。主の来臨を感謝し、いよいよ主にある和解の恵みを体現する歩みへと導かれたいと思います。

皆様の上にも、世界の諸教会にも、主の顧みと祝福が豊かにありますように。(A)